たものです。また、天正年間以前の文献、棟札、墨書は焼失のためいっさい無く、わずかに鎌倉末期（1332年頃）の五輪塔一基を残すのみとなっています。

***五輪塔**　常福院境内右手の一段高いところに雨露をしのぎ大切に保存されています。周辺からは、青磁、黄瀬戸、志野、明染付片、越前系陶片が出土しました。「秋田風土記」によると、常福院は三浦兵庫守盛永の祈願寺と記録されています。

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

しろみずさわ【五城目町浦大町白水沢（しろみずさわ）】

しろみずさわ

以前は城見沢（しろみざわ）と書いていた。秋田中央交通のバス停が出来てから今の名前に変わったようだ。ここから浦城がよく見えたためにこの名がついたと言われている。

1988年11月　浦大町　北嶋鉄之助談

しろみずさわ〈五城目町〉

泉沢とも書く。高岳山と森山の中間を流れる小流の流域部に位置する。西は浦横町に接する。大同2年阿部宮寿麿が当地に聖観音をまつり、貞観4年慈覚大師
の援助で天台宗東谷寺となったという。

〔中世〕白水沢村

戦国期に見える村名。出羽国秋田郡のうち。初見史料は、天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実季の当知行を安堵した朱印状写に、「おしきり村・泉沢村・横町村・満さか村・立すミ湊村」484石余とある（秋田家文書）。「泉沢村」は白水沢村の誤写か、または別称であろう。「慶長6年秋田家分限帳」では、栗沢弥五邸の代官所支配14か村中に、湖東通白水沢69石余と明記。白水沢から高岳山東方の鞍部十八坂越えの道は羽州街道が三倉鼻開削によって整備されるまで、古代～中世の幹線路として機能した。子持沢の東谷寺も、14世紀に修験道場として真言宗に改宗し栄えたが、庇護者の浦城主三浦氏が湊合戦で滅亡して以後、廃寺消滅したと伝えられる。

〔近世〕白水沢村

江戸期～明治22年頃の村名。秋田郡のうち。秋田藩領。「正保図絵図」では泉沢新田村24石、「元禄7郡絵図」で白水沢新田村45石余と図示。幕府に報告した「元禄郷帳」でも白水沢新田村と記載。新田村扱いであったが、この間の「天和4年黒印高帳」では白水沢村当高45石余と表示。宝永2年以後、幕末までは新田の字なく白水沢村として、「享保黒印高帳」では村高62石余・当高46石余（うち本田28・本田並17・新田1）、「寛政村附帳」で泉沢村当高47石余（すべて給分）と認定。親郷一日市村の寄郷である。ただし「享保郡邑記」によると、戸数9軒の小村のため、宝永7年に一時浦大町村の支配（枝郷）下に置かれたといい、「秋田風土記」でも同村枝郷として記載。「天保郷帳」は46石余。村内のアブ沢堤・恋路岡堤は中世末期～近世初期には造成されていたかという（町史）。

明治11年商秋田郡の村として、戸長役場を一日市村とする9か村連合中に白水沢村の村名がある。しかしその後，村名は関連史料で未確認。明治22年、7か村合併で成立した南秋田郡面潟村に含まれたが、大字名も未確認。面潟村大字浦横町の小字となったらしい。　昭和31年面潟村が八郎潟町となり、同33年面潟の一部が分町して五城目町に編入となり、その一部の地区に白水沢が含まれ、現行の五城目町の小字となる。

1980.3出版　角川日本地名大辞典　5　秋田県

白水沢・泉沢

角川日本語地名辞典では中世の朱印状写に「泉沢村」とあるのを「白水沢村の誤記ではないか」としている。しかし、「以前は泉沢と呼んでいたこともある」と、浦大町の北嶋隆太郎氏が語っていることから、おそらく元々は泉沢と言っていたの